

2012年スケジュール

2012年6月21、22日

厚生労働省全国油症治療研究班会議

ホテルレガロ福岡〔福岡県福岡市〕に於いて開かれました。

全国油症一斉検診

下記の11班により年に1回実施しています。

昨年の研究成果

2012年6月21、22日に全国油症班会議が開催されました。多数の基礎的・臨床的研究の報告が行われました。その概要をご紹介します。

平成24年度全国油症治療研究班会議より 〔その1〕

(油症検診受診者のまとめ)

福岡県保健環境研究所の梶原淳睦先生は、平成23年度油症患者血液中PCDF等の測定結果について報告されました。

<報告内容>

平成23年度全国油症検診のPCDF等測定者は、油症認定患者さんが68人、未認定者が202人の計270人でした。この他に過去にPCDF等濃度を測定したことがない、五島市の油症認定患者さん8名の血液中PCDF等濃度を測定しました。油症認定患者さんの血液中PCDF等測定が4年に1回であるため、平成23年度の検診受診油症認定患者さんのPCDF等測定者は例年より少ない人数でした。一方、未認定者のPCDF等測定者は年々増加しており、昨年初めて200人を超え、平成23年度も200名以上でした。また、平成

21年度から過去にPCDF等濃度を測定したことがない油症認定患者さんの血液中PCDF等濃度の測定を開始しており、福岡、長崎で毎年10名程の油症認定患者の血液中PCDF濃度を新たに測定しています。平成23年度の全国油症検診の血液中PCDF等測定結果は油症認定患者さんの血液2,3,4,7,8-PeCDF濃度の平均は110pg/g lipid、未認定者は21 pg/g lipidでした。今年度の未認定者のうち2,3,4,7,8-PeCDF濃度が50pg/g lipid以上であった方は10人でした。

福岡県保健環境研究所の高尾佳子先生は平成22年度及び平成23年度全国油症検診集計結果について報告されました。

<報告内容>

全国油症検診の受診者は、平成22年度は543人、平成23年度は551人で、60歳以上が6割を越えていました。未認定者の割合は、血液中の2,3,4,7,8-ペンタクロロジベンゾフラン (PeCDF) が診定基準へ補遺された平成16年度以降、増加傾向にあります。

内科の自覚症状に関しては、全身倦怠感や関節痛の訴えが約70%あり、しびれ感、頭重・頭痛の順で訴えが多く、他覚所見では、心電図、胸部レ線の有所見率が約30%、それ以外は20%を下回っていました。皮膚科は、問診項目で一番訴えの多かった、かつてのざ瘡様皮疹が50%を超えていましたが、他覚所見では10%未満でした。皮膚科の他覚所見は、黒色面皰の有所見率が約15%と最も高く、その他の項目においては10%以下でした。眼科は、眼脂過多の訴えは約10%でしたが、他覚所見の項目では3%を下回っていました。歯科は、辺縁性歯周炎の有所見率が約40%と最も高く、次いで、歯肉の色素沈着、歯肉の順であり、それ以外の項目では10%未満でした。

各科の有所見率は、近年同様の傾向を示しており、平成22年度、平成23年度も自覚症状や主訴の訴えが高いが、他覚所見では有所見率が低い傾向でした。

裏面もお読みください。→

平成24年度自治体連絡先

福岡県班 (福岡県、大分県、宮崎県)
福岡県保健医療介護部保健衛生課食品衛生係
TEL: 092-643-3280

長崎県班 (長崎県、佐賀県、熊本県)
長崎県県民生活部生活衛生課食品乳肉衛生班
TEL: 095-895-2364

関東以北班 (東京都、川崎市、埼玉県、さいたま市、茨城県、横浜市、神奈川県、栃木県)
横浜市健康福祉局食品衛生課食品衛生係
TEL: 045-671-2461

千葉県班 (千葉県)
千葉県健康福祉部衛生指導課食品安全対策室企画調整班
TEL: 043-223-2638

愛知県班 (岐阜県、静岡県、愛知県、三重県)
愛知県健康福祉部健康担当局生活衛生課食品安全対策グループ
TEL: 052-954-6297

大阪府班 (滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県)
大阪府健康医療部食の安全推進課安全推進グループ
TEL: 06-6944-6703

島根県班 (島根県、鳥取県)
島根県健康福祉部薬事衛生課食品衛生グループ
TEL: 0852-22-5264

広島県班 (広島県、岡山県)
広島県健康福祉局食品生活衛生課
TEL: 082-513-3104

山口県班 (山口県)
山口県環境生活部生活衛生課食の安心・安全推進班
TEL: 083-933-2974

高知県班 (愛媛県、高知県)
高知県健康政策部健康対策課
TEL: 088-823-9674

鹿児島県班 (鹿児島県、沖縄県)
鹿児島県保健福祉部生活衛生課食品衛生係
TEL: 099-286-2786

(油症患者さんにおける症状とダイオキシンとの関連などについての報告)

福岡市立こども病院産科の月森清巳先生は油症患者より出生した次世代、次々世代の性比に関する検討について報告されました。

<報告内容>

カネミ油症発生後に油症患者より出生した次世代、次々世代の性比(男児出生割合)について検討しました。対象は油症発生後に児を得た油症患者さん437例(次世代572例、次々世代344例)としました。油症患者さん、なかでも20歳未満で油症に曝露した患者さんが母親となった場合には、出生した児(次世代)の男児出生割合は0.450と低い傾向($p=0.06$)を示し、さらにこの次世代が母親となった場合の児(次々世代)の男児出生割合は0.348と一般集団(0.514)と比較して有意に低値($p=0.02$)を示しました。一方、油症患者さんが父親となった場合には、次世代、次々世代の男児出生割合は一般集団と比較して差異はありませんでした。これらの成績から、カネミ油症患者の女系の次世代、次々世代では男児出生が減少する継代的な健康影響がある可能性が示されました。今後、このカネミ油症曝露による男児出生が減少する機序を明らかにするとともに、カネミ油症発症後に油症患者さんから出生した次世代のみならず、その次々世代においても健康状態を注意深く見守ることが重要であると考えられました。

福岡女子大学の吉村健清先生は台湾油症と日本油症の死亡状況の比較について報告されました。

<報告内容>

日本油症の2007年末現在の認定患者さん1918人(うち502人死亡)を解析対象として、追跡調査を実施(コホート研究)した結果、男性の全がん、肺がんのSMR(標準化死亡比)はそれぞれ1.26(1.03-1.53)、1.56(1.03-2.27)と日本全国の死亡に比べ高くなっていましたが、これまで高かった肝がん死亡は1.67(0.99-2.63)と下がり、有意な差は得られませんでした。女性については、大きな差は見られなかった。

一方、台湾油症については、郭教授の研究グループが油症患者さん1823人(うち215人死亡)を24年間追跡した調査では、男性の慢性肝疾患・肝硬変の死亡、および、女性のSLE死亡のSMRがそれぞれ2.2(1.2-3.6)、14.7(4.7-34.4)と上昇していることが報告されました。しかし、男女とも悪性新生物のSMR(それぞれ0.9、0.7)の上昇は認められていません。

今回、前述の研究グループから油症患者の死亡を近隣住民の死亡と比較した30年間の追跡調査の結果が提示されました。論文発表はまだですが、学会発表および私信によると、男性では慢性肝疾患・肝硬変、胃がん、造血器腫瘍のSMRがそれぞれ2.5(1.5-3.9)、3.5(1.5-7.0)、3.0(1.1-6.6)と上昇、女性ではSLEによる5人の死亡が報告されました。

以上のように、日台油症のデータは若干相違点が見られ

ました。ただし、台湾油症の患者数は日本とほぼ同じですが、日本油症に比べて11年後に発生していることから観察年数が短く、死亡数が死因解析に十分でないために、比較には十分な配慮が必要です。このことから、引き続き、日台で注意深い追跡調査が不可欠です。

九州大学病院油症ダイオキシン研究診療センターの塚本美鈴先生は福岡県カネミ油症検診者における血中ダイオキシン類濃度とHbA1cの解析について報告されました。

<報告内容>

2007年から2011年度までの福岡県油症検診の受診者について、PCBおよび2,3,4,7,8PeCDFの濃度(2007年度~2010年度までのデータ)とHbA1c値(2011年度のデータ)の相関関係について統計的解析を行いました。複数回受診者はそれぞれの値の平均値を使用しました。

認定者128名、未認定59名、男性78名(41.7%)、女性109名(58.3%)、平均年齢61.2歳 \pm 17.5歳、中央値64歳、合計187名の受診者について解析を行いました。

その結果HbA1c(%)とPCB(ppb)、および2,3,4,7,8PeCDF(pg/g lipid)にはほとんど相関関係は見られませんでした。また認定者と未認定者間のHbA1c(%)値に有意差が認められましたが、年齢にも有意差が見られ(認定者:65 \pm 13.8歳v.s.未認定者:53.1 \pm 21.5歳)、年齢による耐糖能の違いが反映されているものと考えられました。(認定者:5.44 \pm 0.52(%)v.s.未認定者:5.26 \pm 0.68(%))。これらの結果には治療状況については考慮されていないため、今後治療の有無や内容についての詳細な検討を加える必要があります。

九州大学病院油症ダイオキシン研究診療センターの内博史先生は油症患者における血清アディポカイン濃度の検討・第2報について報告されました。

<報告内容>

過去福岡県油症検診を受診し、血中ダイオキシン類の測定歴があり、かつ油症発生以前に出生した認定者232名(平均年齢65.8 \pm 13.0、男性101名、女性131名)、未認定者96名(平均年齢63.9 \pm 11.3、男性31名、女性65名)の保存血清中のアディポカイン(RBP4, resistin, PAI-1, IGF, IL-6, TNF- α)をELISA法で測定したところ、RBP4濃度のみ認定者のほうが有意に高値でした(39.4 \pm 41.6 μ g/ml vs 32.5 \pm 44.9 μ g/ml)。RBP4高値により耐糖能異常が起こることがあるため、今後さらに検討が必要と考えられます。

昨年研究成果の概要は、油症ニュース16、17、18号に続きます。